

2024年度 こどもの木かげ・玉成幼稚園 自己評価・学校関係者評価

1. 基本理念・保育方針

■こどもの木かげ 2002 基本理念

『**汝らは、地の塩、世の光である**』
(マタイによる福音書5章第13節—14節)

キリスト教の愛の精神を基とし、幼な子が、自ら生きる力を高め、豊かな個性を育むことをめざしています。
こどもの木かげ(玉成幼稚園・野のはな空のとり保育園)では、0歳から就学まで一貫した保育方針にもとづき子どもの育ちに取り組んでいます。

■玉成幼稚園 保育方針

個の生活と集団での生活がバランスよく営まれるように配慮しながら、友だちや周りの人たちに受け入れられていることを意識し、お友だちとの相互交渉を通じて「ともに生きる喜び」を身につけられるように育てていきます。

保育は、時間と場所の提供であり、子どもの傍らには子どもを励ます保育者がいて、イメージや想像力をたっぷりと与えてあげられる保育の時間と、子どもが自分で遊び、自分で学ぶことができるように工夫された環境の中で保育の流れをつくっていきます。

こんな子どもに育ってほしい…アルウィン学園のめざす子ども像

- ①生きる力の礎である「自らの力で探求し判断しながら人とのかかわりをととした生きる喜びや自己表現が達成」できるように。
- ②「ひとりひとりが違ってよい」興味や得意なことを伸ばし個性豊かになれるように。
- ③遊びをととして感性や知的能力・創造性・社会性を体得できるように。

すべては環境から

安心して生活し、遊ぶ「空間」環境と、優れた遊具や本物・良質な家具や調度品といった「物的」環境、子どもを愛し慈しむ心と自己研鑽を怠らない保育者という「人的」環境、これらが相まって子どもが主体的に学びの物語を紡ぐ、充実した「時間」の環境がつけられていきます。

2. 活動状況と自己評価

【基本的事項】(こどもの木かげ共通)

◆こどもが、自らの力で取り組む姿勢が育ち、周囲とのかかわりを高め、育ちあえているか

遊びを通して試行を巡らし、自分の体を使ってまた、友だちと共有したり、協力しあいながら、様々なことを学んでほしいと思い、子ども自身が自ら考え、感じ、試行錯誤のできる子ども主体の保育を行った。保育者はすぐに言葉をかけたり、手を貸すことはせず、できるだけ自分で考え行動できるように見守った。子ども同士の関わりの中で子どもは自分と他者との違いを知り、たくさんのぶつかり合いや葛藤を通して、悩み考えやがて理解し合い、共に生きることを学んでいきます。認め合い、力を合わせることの楽しさ喜びを味わうまでの道筋を大切に保育を行った。

◆子どもたちに豊かな感性が育つようなりくみや自発的なあそびをとりくめるように保育をおこなってきたか

子どものありのままの姿を受け止め、まなざしを向け、触れ合うことを大事に心に寄り添う保育を心がけた。このことは子どもたちの心に愛が育ち、自分に自信を持ち、人のことも大切に考えられるようになると考えます。人は自然の一員ですから、幼児期の一番心が動くときに自然に触れ五感を通して「きれいだな」「おもしろいな」「いい匂い」「おいしい」など、豊かな感性感情が養われます。これらの経験から子どもたちは好奇心・探求心を育み、生きる力を身に着けていきます。豊かな保育環境の中で、「やってみよう」「面白そう」などと自ら環境に動きかけていきます。そして様々な学びをします。子どもたちは自由に仲間と共に楽しみ、表現しながら自分で考える力、行動する力を養います。愛情深く、自然を大切に、主体性を育む保育を行った。

【重点的にとりくむ課題 (今年度の事業計画から)】

◆こどもの木かげの基本的理念・保育方針、幼稚園教育要領、保育所保育指針を踏まえた質の高い保育を実践する

保育の質が高いということは、子どもが豊かに過ごせる環境であるということです。保育とは子どもを保護し、心と体が適切に発達するよう育てることです。保育の質が高いということは子どもの心と体の発達に良い影響を与えることができるものです。そのことを踏まえ幼稚園教育要綱をよく読み込み、教育課程に基づき、年間、学期、月、週、日案を学年ごとに作成し、保育を行った。保育者は日々の言動が幼児の成長に大きく影響することを認識し、子どもの生活が豊かになるように、子どもに対して愛情を示し、子どもの心に寄り添うことを基にして、柔軟性、忍耐力、包容力、コミュニケーション力、使命感などの資質、能力が身につくよう努めた。早期教育ではなく、可能性や資質を引き出していくことを大切にしたい。

◆保育園と幼稚園が一体となって目指すところを常に確認し、職員間の意思疎通、相互交流を行う

新しい体制を整えつつまだまだ落ち着かないところがあり、まずは幼稚園の保育を充実させることを念頭に置き、保育に集中できるように心がけた。保育園の要望に応えきれないところもあったかと思われる。今年度短時間、特に長時間保育が試行錯誤して今まで通りには行かない状況の中、子どもたちにとってより良い保育の確立を目指して歩んでいる所です。今後職員間の交流、合同研修も行われるよう努めていきたいと思う。

◆地域支援事業コミュニティコラボニコニコのたねの再構築

幼稚園の施設や人材を生かした地域の子育て支援に積極的に取り組むことを目標にあげ、「ふたつの芽」親子グループは週1回、2回と選択でき、2学期からは無理をしない範囲で母子分離を行った。園庭開放も希望者にはなるべく応じられるようにした。講座「あつまれポルタ」は元プロのサッカー選手の保護者に依頼し「フットサル教室」を3回開催した。土曜日なので卒園生の参加もあった。エデュテイメントプレイス(ピアノ・バイオリン)も人気があり順番待ち状況。学校、幼稚園、保育園共同の「ソフィア学びの泉」講演会も開催された。地域で子育てしている保護者の状況を知り、保護者も子どもたちも楽しく過ごすることができるよう施設を開放し、子育て中の保護者と気軽にしゃべりなどできる機会を増やしていきたい。

◆誰もが「働きやすい職場」「働きがいのある職場」の実現をめざす

働きやすい職場は、快適な環境や制度、良好な人間関係などの要素があり、安全安心に働ける職場を目指し続けたい。働き甲斐のある職場とは、自分の思いと職場の目的が合致し頑張れば報われると思える職場の実現であると思う。また、確実に休暇を取得できるように、休むことで心身ともにリフレッシュでき、働く意欲の持てる職場づくりを管理者だけでなく、保育者全員で協力し作り上げていきたい。園児数の減少による経営も考慮しなければならず、非常に難しい問題ではあるが、このような時期だからこそ、経営理念をみんなでき共有、理解しながら働く意味を考えたい。

3. 今後の課題・取り組んでいきたいこと（中長期的視野に立って）

- 1 少子化、園児減少に伴い、園児確保のためにできることを考える。保護者と接点を持つことで園の魅力を伝え、保護者に寄り添う関係性を築いていく。選ばれる時代に生き残りをかけて園独自の特徴を考える。今年度は幼稚園としてできる限りのことは実施してきた。杉並子育て応援券の利用（ふたつの芽、預かり保育）・外部のお弁当注文・自然保育の一環としてピオトープの設置。すくわくプログラム推進事業、多様な他者との関わりの機会の創出事業、の補助金を活用し、さらに幼稚園としてできるものを探っていきたい。
- 2 開かれた幼稚園を目指し、卒園生、卒園保護者、地域とのつながりを広げ深めていきたい。卒園生が気軽に遊びにこられるような雰囲気を作っていきたい。現在も月1度の「バタフライガーデン」には卒園生親子が参加している。
- 3 短時間・長時間保育の壁をあげ、だれでもが幼稚園開所時間内は利用できる預かり保育として機能を早急に検討したい。預かり保育「ほし組」の利用者が増えている現状、利用する子どもの区別なく保育していきたい。また、質の高い長時間保育の実践、保育者の働き方も検討したい。
- 4 確実な人材確保ルートを構築したい。玉成保育専門学校はじめ、各養成校とのつながりを強めたい。そのためには、教職員が働きやすく満足度の高い職場、質の高い保育を構築していきたい。
- 5 施設型給付移行への検討

◀ こどもの木かげ運営委員会による評価 ▶

1 評価項目の達成及びとりくみ状況について

今年度の自己評価を見ても各項目での評価が昨年度よりも概ね上がっており、園の活動全体が活発に精力的に行われ、それぞれが良い相乗効果をもたらしている印象が伺える。
今年度は満3歳児保育の導入実施、インスタグラムで園の様子をほぼ毎日発信、おうちえんアプリの導入、子育て支援「ふたつの芽」では母子分離の試行、あつまれボルトでは保護者によるフットサル教室の開催、ふたつの芽やほしぐみでの杉並子育て応援券の利用開始、ピオトープの造成、バタフライガーデンを通じた卒園生も含めた繋がり、保護者とのおしゃべりの会の定期的な実施、課外活動ジャクバの導入等々を積極的に行ない、「新たな玉成幼稚園」を模索し続けた。
また一方でさらなる保育者の研鑽にも努めており、各種研修の実施・学び・フィードバック共有が体系的に整ってきた。

2 今後とりくむ課題

子どもへの向き合い方は勿論、保護者、地域、保育園や小学校との連携など、幅広い場面で玉成幼稚園が果たす役割が従来よりも多く求められてきている。世の流れとして少子化による園児減少は避けられず、園としては経営的には厳しい状況であればこそ、玉成幼稚園として何を大切にし何処を目指すのかを常に考え、その役割を果たしていくことで「選ばれる幼稚園」となっていくことが求められていく。

3 総合所見

子ども一人ひとりを尊重し、その子どもの育ち及び発達に合わせた保育を行うことを目指すということがより明確になり、保育者間での話し合いや振り返り等を通じ、より良い保育を目指そうという気質がさらに高まっているように見受けられる。
また、今年度は前述のような新たな取り組みも積極的に取り組み実施しており、進化を続ける姿勢は高く評価したい。次年度の入園児数が微増となっていることはこれらの地道な取り組みの成果と捉えて良いのではないかと。
次年度もさらなる取り組みの模索を期待したい。